ラドコ チェコ出身の元 神 者（前半）： 神 からキリスト教へ

：

明:

ある筋金入りの 神 者がキリスト教に 味を持ちますが、重要な疑 に する答えを いだすことが出来ません。

目: 事新改宗者ムスリムの逸 男性

より: ラドコ

日09 Jun 2014

集日 09 Jun 2014

私は以前、神の存在など して信じたりはしない、という 神 者を知っていました。彼は、信仰者というのは の弱い人々で、その 能さと 力さから教会へ行かなければならない必要性を感じているような人々であるという意 を持つ人物でした。宗教について する、相手を 得出来なければ、彼は 慨しました。彼は信仰者たちを 蔑していましたが、それは殆どヒステリ に近いものでした。ところが、彼には信仰者の 友がおり、一 にいるときは宗教 をしないことで合意していました。

ある日この男性は、珍しく友人の いに えて教会に行くことにしました。そのとき彼は何らかの理由で 弱になっていたのかも知れません。彼は、ミサの最中に笑い出し、 教から信仰者たちを指さし嘲笑するような自分の姿を思い描いていました。しかしなが

ら、私たちも知るように、神の御 とは不思 なものです。彼は教会へ行き、 方のベンチから、祈りを捧げる人々を凝 していました。

ミサが始まると、彼は人々に皮肉な を浴びせていました。そしておよそ15分 の 教が始まりました。すると 教の途中に突然、彼の目からは が流れだしたのです。喜びと幸福感の混じり合った奇妙な感情が、彼の身体全体から ち溢れていた 心を洗い流しました。ミサの 、友人の二人は一 に 路に着きました。彼らは分かれる寸前まで沈 を保っていましたが、 神 者の男性は、また一 に教会に行けるかと友人に いました。そして友人は翌日、また教会に行くことにしました。

その 神 者の男性が、この私自身であるということにお 付きになった 者もいるかも知れません。 去の私は信仰を持つ人々に し、 蔑と 意しか感じてはいませんでした。しかし、自分が偏 を持たれたくなければ他人に偏 を持ってはならないと牧 が いた、1989年のあの 教の 、私の人生は 的な 化を遂げました。

私は定期的に教会の集会に出席するようになり、神とイエス キリストについての知 を望するようになりました。また、クリスチャンの若者たちとの会合にも を出すようになり、精神的体 について し合ったりもしました。私は 活したかのような 分でした。私は信仰者の人々との触れ合いを必要とするようになり、 去18年 の空白を取り そうとしていました。

私は、キリスト教の洗礼を除き、精神的 についての きを与えることのなかった 神 者の家庭で育ちました。6年生の 、学校に共 党 がやってきて、なぜ神は存在しないのかについての 明を受けた があります。私はその言 をすべて吸 していたのを えています。私の合、 得する必要はありませんでした。彼の言 はすべて信じたのです。彼の信仰者に する 蔑と 意は私自身のものとなりました。しかし今、私はそれ以来の空白を取り さなければなりませんでした。

私は牧 を始め、新たな方向に いてくれる数人の人々と会いました。私は多くの疑 を抱えており、彼らはそれに答えてくれました。 に、私は自分の大きな いに 付きました。

私はそれらに熟考 考察の余地を与えることもなく、すべて受け入れていたのです。彼らは色々なことをありのままに 明してくれたと言えますが、それは彼らにとって公平ではなかったかもしれません。事 、それは私の失 だったのです。私は彼らの言 について熟考もしなければ、批判的にも考えたりもしませんでした。このことは に状 を非常に　にしました。今思い返してみると、私の 度に重要な影 を及ばした要素は年 でした。私は信仰のような、重大かつ　な物事を 切に理解するには若すぎたのです。

私は良いクリスチャンになりたいと っていましたし、それに向けて必死に　っていたことを神はご存知です。しかし、　の　と共に、 言者イエスの神格性、また原罪の概念のような、バイブルとの矛盾において 得することが出来なくなりました。牧 たちは私の疑に答えようとしてくれましたが、やがて彼らの忍耐は かなくなってきました。そういった事柄は、信仰の一 として受け入れられるべきであり、そのような疑 は　の　で、私の神との を分け隔てるものだ、と言われました。今でも、当 の精神的指 者と口 したことを えています。その出来事は私の 去の自 的 向を呼び起こしました。私は若かったので、 局、自分は　っていたのかと思い始めました。

私がムスリムになった

私のイスラ ムへの道は、容易なものではありませんでした。私がキリスト教に失望していたことから、その すぐにイスラ ムに鞍替えしたのかと思われるかも知れませんが、そうではありません。当 、私がイスラ ムについて知っていたことといえば、ムスリムたちが神をアッラ と呼んでいること、彼らがバイブルの代わりにクルア ンを むこと、そして彼らはムハンマドという人物を崇 しているということだけでした。また当 の私には、イスラ ムを受け入れる　は出来ていなかったと思います。

私は教会から ざかり、一匹狼のクリスチャンになりました。私は信仰者の集まり、または教会を恋しいとは思わなかったものの、神への思いが私の心の奥深くに根ざしており、それを手放すことは出来ないことに 付きました。私は泣いたりするどころか、全く正反 でした。私は神との　を一人で ごすことに喜びを感じ、神が私の にいてくれることを っていたのです。

その 、私は次から次へと愚行に走るようになって行きました。　な暮らしと欲望に溺れたのです。私はそのような道が、自分を神から ざけ、地 へと がるものとは　出来ていませんでした。ある友人は、最底 まで落ちなければ、足元にある地面を感じることなど出来ないんだよ、と言いました。正に、それが私に起きたことでした。私は落ちるところまで落ちたのです。サタンが 腕を げて私を待ち えていたのは容易に想像が出来ますが、それでも神は私を　てはおらず、私にもう一度のチャンスをくれたのです。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/jp/articles/472

著作　2006-2015 断　を禁じます。　2006 - 2023　IslamReligion.com. 断　を禁じます。